

メープルレター (56)

メープル街道コロナの足音

晩秋の頃です。真っ赤に染まったメープルの葉が街道に沿って続き、遠くの山々は紅や黄色の葉の間に緑が見え、色が重なりあい、錦を織り成しています。美しい秋が訪れ、燃え上がり、冬に向かっていきます。

時の経つのは早く、9月はあっという間に過ぎて行きました。

「どう、新しいコレクション見に来ない？ 近くのコンドミニウムの一室を借りて個人のミニ美術館にしたんだ」

ある日、サムライ博士からお誘いがかかり、出かけて行ったのは9月は半ばのことでした。鎧兜、槍等に加え、特に力を入れているのが刀剣で、日本の国宝の刀鍛冶から手に入れた名刀も少なくありません。まるで侍がそこに生きて暮らしているかのようです。各展示物には美術館のように説明書きもきちんとしています。私財を投げ打ったミニ美術館です。一体、何十億のお金を使ったのでしょうか。ドリトル先生はただ見とれるばかり。頭の中では、鎧兜を身につけ刀で切りまくっているのかもしれませんが。

「君たちにはどうしても見て欲しかったんだ。設置も、展示も、全部妻と2人でしたんだ。」

「偉い！。奥さんも素晴らしい理解者。それにしても職人氣質の展示ね。説明も歴史的にも研究されているし、日本文化の研究者とも言えそう。」

「好きなんだ。このコレクションは僕の心のバランスをとるには役に立つんだ。ニューヨークの骨董屋から良い物が入ると連絡が来るんだ。」

長い間、癌の研究をし、一昨年は脳腫瘍用の薬品を、現在は、乳癌や子宮癌用の抗がん剤を研究をしていると話していました。

「プレッシャーのかかる仕事でね。今の研究も2年後位にはアメリカの会社から市場にでると思うよ。副作用のない、がん細胞だけを撲滅する薬品なんだ。人を助ける仕事をしたいんだ。研究とコレクション、これで僕の心のバランスが取れるんだ。」

「それにしても、どうやって家から(家が美術館代わりだったのです)これだけの物を運んできたの。引っ越し屋には壊れやすくして任せられないんじゃない？」

「僕の車に乗せてきたんだ。鎧兜は車の中に座らせて。」

彼のBMWの車に鎧兜が並んで座っているなんて。出会った人は震え上がったかもしれません。見れば、車のバックナンバーはKATANA(ここは数字やアルファベットを含めて6文字でバックナンバーができています)です。戦国時代は馬に乗り、現代はBMWにのる武将たちでしょうか。サムライ博士の奥さんは、元医者でマダム田中のファミリードクターでした。サムライ博士の研究も、医学的知識がある奥さんだからこそ理解できることなのかもしれません。夢中で研究し、夢中でコレクションに凝るサムライ博士を楽しみながら優しく眺めているようです。

その後食事をしたレストランの横には教会らしい建物がありました。

「ここって、もしかしたら教会？」

「そうなんだ。ドリトル先生をここに追いやって、懺悔でもしてもらっている間に3人で美味しい物でも食べる？」

「それ良いかも。懺悔することいっぱいありそう。」

「ただし、多様目的のね。ローテーションで基督教の教会になったり、回教の寺院になったり、ユダヤ教の教会になったりするんだ。共存だね。今は、宗教はこうあるべきかもしれない。」

「そうだと思うわ。昔はスペインなども、一つの教会で多々の宗教が共存して儀式が行われていた所も多かったようですものね。」

彼が住んでいる所は、ショッピングセンター、スーパーマーケット、銀行、学校、コミュニティーセンター、レストラン、スポーツ施設など快適な暮らしがここだけでできる、アメリカナイズされた高級住宅のコミュニティーになっているセントローレンス河沿いの小さな島です。隣近所とも気軽に付き合うらしく、途中で、

「やあーこの間はどうも。楽しかったね。」

見知らぬおじさんがサムライ博士を見つけてやってきました。

「また、今度集まるうじゃないか。」

5-6分間話すと手を振って帰っていきました。

「ケベック州知事の飛行機会社経営時代の共同経営者だよ。この間、彼や近所の人たちと10人くらいで集まってチキンパーティーしたんだ。」

「チキンパーティー？」

「晴れた日に、気が向いたら、チキンを買いに行って隣近所に声をかけて気軽に集まるんだ。チキンとビールでね。」

「食器は全て紙かプラスチック。庭でするし、洗い物はないし。。ここではポピュラーだよ。」

「それも気軽に楽しそう。」

話しは尽きず、夜もふけ、周りのテーブルから一つ一つ人影が消えていきます。コロナ禍で従業員の数を減らしているレストラン業界は、サービスの人出不足でオーナーは駆けずり回っています。やっと一息ついているのかもしれませんが。お料理よりお話の美味しいお食事でした。

9月もどんずまり、イタリアのバカンスから戻ってきた義理の長男から電話がかかり、

「美味しいお肉が手に入ったから夕食に来ない。」

ということは預かっていた猫の配達ということのようです。

ドリトル先生は大喜びです。前日に空港まで迎えに行ったので、そのお礼ということもあるようです。工事中の道路にせいで道に迷い、猫に鳴かれながら30分の予定が1時間半もかかってやっと着きました。奥さんの連れ子も入れ、5人の孫たちも総勢で待ちわびていました。子供

達のエネルギーあふれる夕べとなりました。お土産のイタリア高級ワインも美味しく、楽しいひと時が過ぎていったのですが、3日後のこと、

「子供達が、コロナ検査で陽性の結果が出たんだ。2人とも。熱が40度もあるし。」

「そりゃ大変だ。もしかして、あの夕食の時はすでに感染していたのかい？」

ドリトル先生は真っ青です。

「そうなんだ。学校のクラスターなんだ。2人(長男と長女)は違う学校なのに2人の学校がそれぞれクラスター。勿論休校になったけど。パパ達に知らせておかないといけないから。高齢だし。」

ワクチン接種年齢に達しない子供たちの感染確率は高いのでしょうか。感染者に15分以上接触した人たちはPCR検査を受ける義務があり、ドリトル先生もマダム田中も、即走りました検査場に。感染した症状は一切無く(いえ、ドリトル先生は前から風邪をひいていたので少しそれが悪化しましたが、マダム田中はすこぶる元気)、幸い、検査結果は2人とも陰性でした。子供達の症状も回復に向かっているようで、胸を撫でおろしています。それにしても、コロナの足音が近づいているのが聞こえてくるかのようです。